ウルリム
響
울림

特定非営利活動法人
聖公会生野センター機関誌
第38号
2006年2月20日発行
題字：康秀峰

URL http://www.nskk.org/province/ikuno　E-mail:ikuno@nskk.org

私の中に犯罪の原因を見る

谷　昌二

昨年、2005年1月、東京新宿にある高麗博物館の館長の宋富子（ソンブジャ）さんが沖縄に来てくださいました。私は、初めて見る彼女の一人芝居「身世打鈴（シンセタリョン）」“身の上ばなし”にすっかり魅せられてしまいました。

在日韓国人二世として、奈良県の非差別部落に生まれ育つ。その生い立ちと苦労、いじめの中で自分の出生を隠し通した少女時代。やがて、子どもが通う保育園を通してキリストに出会い、同時に、日本と朝鮮の史実を初めて知り、紆余曲折を経ながら、徐々に自分に誇りを持つに至ったその生涯を、見事に演じてくださいました。内容の深刻さにもかかわらず、美しい容姿と、しなやかな演技から溢れる優しさに、私は、ぐんぐんと引き込まれていったのです。

実は、私がこの案内のパンフレットを手にした時、ピンと来たものがありました。きっと、彼女は、私と同郷に違いない。あるいは、年齢もそんなに変わらないのではないか。芝居を見る前から、ワクワク、ドキドキ、不思議な緊張感がありました。そして、見事その直感は当たりました。彼女は、全く私と同年齢で、私の家とそう遠くない所に住んでいたのです。

私の思い出が一気に幼い頃に飛びます。白いチョゴリを着て、リヤカーを引っ張って、古着、ぼろ、くず鉄を集めて歩く女性の姿が見えてきます。幼い私たちが、その姿に出会うと、グループになって、その（朝鮮語の）なまりある日本語を口まねしたり、差別語を口にしてはやしたてていました。知らない内に、幼い時から私は、差別体質を見事に身につけて育っていたのです。しかし、その時のオモニの態度は見事でした。決して、自分の国を恥じるな。しっかりと誇りをもって育ちなさい。母は子に心を込めて教えておられたのです。

「神との対話」（N．ウォルシュ）という本で出会った言葉が、私の座右の銘になっています。“あなたが自らの中に犯罪の原因を見出したとき、ようやく犯罪の温床となる原因の治療を始めることができる。”世の暗い出来事を、ただ人ごとのように嘆いたり、批判をしていては、事態は決して変わらない。いや、むしろ更に暗くするばかり。どんなに遠くの犯罪、事件についても、必ず自分の中に、その原因となる要素があることに気が付くこと。ここから、世を変えて行く何かが始まる。私は、今、その自分をしっかりと見つめながら、祈り、行動をしたいと願っています。

（たに　しょうじ　沖縄教区主教）

もくじ

私の中に犯罪の原因を見る/1
時のしるし　「夢が訪れる夜明け」―文益煥牧師のこと/2
韓国市民の眼⑭　絶望の勧め/3
多民族・多文化共生のすすめ⑯　京都で民族学級を拡げよう/4
大阪人権博物館の総合展示がリニューアル/5
写真　聖公会生野センターの活動/6.7
こみち寄せ　祝80回　笑福亭鶴瓶師匠来演/8
訪韓ツアーに参加して感じた/9
こんな本あります　「本から在日コリアンを考える」㉔/10
詩『自立』/11　編集委員リレーエッセイ/12

「夢が訪れる夜明け」――文益煥牧師のこと

井田 泉

私は昨年11月、大阪の韓国総領事館で詩人・尹東柱（ユンドンジュ）（前号をご覧ください）について講演する機会がありました。その準備をしながら、彼の竹馬の友と言われる文益煥牧師のことが気になり、『夢が訪れる夜明け――文益煥獄中書簡集』（シアレヒム社／影書房）を探し出して読みました。

1977年6月1日、ちょうど彼の59歳の誕生日、妻と息子たちが断食中の彼を全州刑務所に訪ねました。

「この国が民主化の方向に転換する日が来るまで、無期限にやるつもりでいる。人間は死に場所を得ることが大切だが、生涯の仕事である旧約聖書翻訳も一段落したことだし（筆者注・彼は韓国の共同翻訳聖書事業・旧約の部の中心的役割を果たした）、今たまたま民主化運動のどまん中に立たされていることを思えば、死に場所としては、これ以上のものがあろうとは思えない。」

「裁判のときは20日間も何も食べないでいたのにちゃんと3時間、陳述ができたが、今度も自分ひとりの力ではないように思えるよ。……他の方々に、私のことで祈ったりしないようにと言ってくれないか。祈るのなら、国のために祈らなくては。……イエスさまの断食は、ほんとうにほんとうにきびしい状況の中でのものであった。それに比べれば、静かに横になって医師の診察を受けながらやっている私の断食など、何でもない。……今度の断食は神が命じられたことだと信じている。」

6月7日、カナダから到着した文益煥の母は彼にこう言いました。

「……そうは言っても私は自分の二人の息子のためだけに祈ったことはなかったよ。ひたすら民族と民主主義のために祈ってきたんだよ。……権力にへつらって卑屈に生きるなんて、ほんとうに生きているとは言えないからね。わが国の民衆はそのことを知っているから、抑圧する独裁者と戦っているんだよ。」

彼は母に、イエスさまの受けられた荒野でのサタンの誘惑のことを話した。

「＜自分への称賛を拒もう＞そう思っただけでは、この試みには勝てません。そこでわたしは＜すべての栄光は神にのみ委ねよう＞と思ったのです。そうしたら心が軽くなってうれしくなりました。……目を閉じると、その瞬間、神を讃える思いが湧き上がってくるのです。」

文益煥は1989年3月、南北統一を促進するために非合法で北朝鮮を訪問し、1994年に逝去しました。

1986年の正月、彼はこの書の監訳者である鄭敬謨（チョンキョンモ）への手紙の中でこう書きました。

「日本はあまりにも早く大きくなり過ぎたように思われます。このような急速な力の膨張は、おそらくその結果を危懼する人よりは、それに酔い痴れる人の数をふやして行くでしょうし、それを背景とする自信が尊大（アロガンス）に変わるとき、日本はもう一度、破綻の危機を迎えることになるでしょう。」

それからちょうど20年、彼の危惧は現実となっています。靖國神社に象徴される歴史の美化・正当化の洪水、憲法第9条の「戦力不保持」を破棄して軍事大国を根拠付ける改悪への急速な動き、政治による教育の管理……。祈りと学びとささやかな実践をとおして、私たちは天国を地上に呼び寄せる（「み国が来ますように」）歩みをしたいと願います。

（いだ　いずみ　京都復活教会牧師）

絶望の勧め

姜恵楨

日本社会での「韓国」「朝鮮」や「中国」は、単なる外国の国名ではなく、ある意識を伴って響いてくる特殊な記号のようだ。日本のアジア侵略や植民地支配という負の歴史を連想させる記号、アジアへの蔑視による居心地の悪さを刺激する記号、在日外国人差別という日本の闇を映し出す記号…。そういう意味では、時の日本の民主主義の状況を映し出す、リトマス試験紙といえるかもしれない。そんな韓国・朝鮮をめぐる日本での二つの現象が、ここ数年の日本で目に入る。一つは、韓流に象徴されるエンターテインメント産業の影響により、韓国への好意的な関心が高まっていること。日本で韓国が「流行る」など想像もできなかった私には、嬉しい隔世の感がある。もう一つは逆に、韓国・朝鮮への嫌悪や敵意を現すことに、歯止めが利かなくなっていると思える事柄だ。例えば、日本のテレビや書店の新刊コーナーを見ていると、一昔前ではなかなか表に出られなかったと記憶されるタイトル…、韓国・アジアへの蔑視や嫌悪感を露骨に表現したものや、朝鮮との歴史について事実関係さえ歪めているような書物などが少なくない。そういう暴力的な言説が、多様な価値観という美名の下で、或いは一種のファッションとして堂々と語られたり、刺激的で扇情的であるほどウケているようにも見える。人々の感覚が悪い方向へ慣れてしまい、常識の軸が少しずつずれることで、日本社会の自浄能力が薄れてきてはいないかという印象がある。

こういった二つの現象を見ていると、韓国・朝鮮に対する日本社会の視線は「韓流と嫌韓流」「ヨン様と金正日」に引き裂かれ、善玉と悪玉を使い分けることでバランスを取っているように思えてくる。そして、その視線の分断や矛盾は、リトマス試験紙ともいえる朝鮮との付き合いだけでなく、今の日本がどこへ向うのかという日本社会内部の問題において、より克明に現れているという感が否めない。

韓国から眺める今の日本の方向は、真の平和・民主主義・人権へ向うのか、それとも管理・抑圧・戦争への道を強めるのかの岐路で、危ない逆行を強めているように見える。更に、そのことへの周辺国の危機感が、どうも日本社会では真摯に受け止められていないのではないかという心配が、不安を増幅させている。

「北（朝鮮）の脅威」を盛んに叫ぶ日本が、実は周辺国からアジア最大の軍事的脅威と捉えられている事実を、日本の多くは自覚しているだろうか。また、誠実で善良な生活を営む多くの日本市民が、国際的常識では許されると思えぬ反歴史的・暴力的な言動を「発言の自由」の名で放置する間、自らが対決を好まぬ沈黙者として権力に取り込まれていってはないだろうか。

そういうもどかしさを感じるとき、私は最近、日本の人々がもっと困り果てて絶望すればいいのにという、意地悪な思いに駆られる。多くの人々の努力にもかかわらず状況がなかなか好転するよう見えないのは、現状を憂って行動する善良な人々でも、本当はこのまま何となく生きていけると思っているからではないかという疑いのためだ。もしそうだとすれば、今の日本に足りないのは平和な社会に向けた創造力や希望より、現状に打ちのめされ痛みの中で徹底的に絶望することかもしれない。「絶望の終わりは希望の始まり」ともいうではないか。

（かん　へじょん　アジアの平和と歴史教育連帯国際協力委員長）

京都で民族学級を拡げよう

金光敏

京都市内の民族学級についてご存知だろうか？京都にも在日コリアンは多い。でも、意外にこの街の民族学級は知られていない。民族学級は、京都市立陶化小学校、山王小学校、養生小学校にあり、５名の民族講師が京都市教委によって措置されている。この３校の民族学級は、1948年の阪神教育闘争を契機として設けられたもので、解放後の在日朝鮮人史とともに歩んできた。

京都市内の民族学級の特徴は、教育課程内（授業）を使い、コリアンの子どもたちを対象に取り組まれること、民族学級を指導する民族講師は、朝鮮総連京都本部を通じて招聘されていることである。

私はこれまで、大阪の民族学級に関わりながら、京都の民族学級に十分な関心を持っていなかったが、最近、京都の民族講師たち、また京都の在日コリアンの人権運動に取り組むＮＧＯと交流する中で、遅ればせながら、京都の民族学級の実態に触れた。

京都の民族学級の状況は、この間顕著に後退を強いられてきており、大阪の民族学級がこの間少しずつ進んできたこととは反対で、驚きを隠せない。京都市の民族学級は、解放直後の朝鮮人学校強制閉鎖の代替措置として誕生したものであり、京都の同胞社会が勝ち取ったものである。いわば民族学級は、自治体の「戦後補償」と言える。しかし、ここ近年、民族講師の勤務時間が減らされ、給与額の減額が続いている。本当に3年後、5年後に民族学級が残っているのか不安だとの声もある。

こうした現状は、京都で民族学級の支援体制が整わず、行政から「お荷物」扱いされ、何ら効果的な対応ができていないことにある。その背景には、京都の民族学級に対する誤った認識がある。

私も直接聞いたことがあるが、京都市内3校の民族学級に関わり、私が特徴としてあげた前の2点が、民族学級を否定する理由とされているのである。

まず、民族学級が教育課程内に実施されコリアンの子どもたちを対象としていることが批判されている。コリアンの子どもたちを「抽出」することは、日本人の子どもたちとの分断だという。この批判は、大阪の民族学級でも広く言われてきた。珍しいものではない。

『民族上、宗教上もしくは言語上の少数者、又は先住民が存在する国においては、当該少数者または先住民に属する子どもは、自己の集団の他の構成員とともに、自己の文化を享受し、自己の宗教を信仰しかつ実践し、または自己の言語を使用する権利を否定されない』

子どもの権利条約第30条で、在日コリアンの子どもたちが、同胞の仲間たちと自らの文化を享有し、自己の言語を使用することを「人権」と位置付けている。

民族学級が、コリアンの子どもたちを対象としているのは、マジョリティからの影響を受けない「安全・安心」を優先するためであり、日本人の子どもたちとともに学び、遊ぶ空間は、民族学級以外の学校教育空間でこそ十分に享受されなければならない。

他のマイノリティにも共通するが、マジョリティの影響下から独立した「サンクチュアリ（安全な場所）」の確保は、心身的安定を図り、人権保障の基本をなす。民族学級が教育課程内に、コリアンの子ども、すなわち民族的・文化的マイノリティの子どもたちを対象としていることは、否定されるべきことではない。

一方、京都の民族学級に対するもうひとつの批判は、京都総連との関わりだ。朝鮮半島の分断下で、民団、総連という政治組織の片方のみが関与することの問題点はあるとは思うが、しかし、今は南北和解・統一の時代であり、少なくとも「総連だからだめ」という主張は説得力を欠く。むしろ、民族講師の低い給与に、京都総連の支援があったことを忘れてはならず、否定ではなく「提案」することで、京都市内の民族学級をより広げていく知恵と行動が必要だ。コリアＮＧＯセンターは、京都の民族学級を支援する立場だ。民族学級は、子どもたちにとって尊い場、在日社会の財産だ。民族学級を守り広げたい。次回も京都の民族学級を紹介したい。

（きむ　くぁんみん
ＮＰＯ法人コリアＮＧＯセンター事務局長）

大阪人権博物館の総合展示がリニューアル
—「在日コリアン」コーナーも一新—

文公輝

2005年12月４日、大阪人権博物館（愛称：リバティおおさか）の総合展示が、「私が向きあう日本社会の差別と人権」を統一テーマとしてリニューアルオープンしました。「在日コリアン」をテーマとした展示コーナー（実物資料27点、写真パネル17枚、図表・文字・証言などを記したパネル17枚）も設けられており、「植民地支配と差別との闘い」、「指紋押捺拒否」という２つのテーマで構成しています。

一つめのテーマでは、現在の在日コリアンの被差別状況を植民地支配との関連でとらえつつ、各世代の闘いを紹介しています。元日本軍軍属で、戦後補償裁判の原告として闘った姜富中（カンブジュン）さん。戦後に「密航」して猪飼野で暮らし、入管による強制送還の危機に直面した一家４人。日立製作所から受けた就職差別と闘い、差別撤廃を求める市民運動の先駆けとなった朴鐘碩（パクチョンソク）さん。長年にわたり民族講師をつとめ、大阪市民族講師会の共同代表でもある朴正恵（パクチョンヘ）さんなどに関係する資料を展示しています。猪飼野をはじめとする戦前の在阪朝鮮人の集住地域の様子を伝える歴史写真なども多数展示しています。

二つめのテーマでは、在日コリアンなどの外国籍住民によって取り組まれた、外国人登録法の改正と指紋押捺義務の廃止などを求める運動を紹介しています。指紋押捺制度がはじまって以来初めて、1980年に押捺を拒否し、その後の運動の先駆けとなった韓宗碩（ハンジョンソク）さんの、「指紋不押捺」とスタンプが押された外登証などを展示しています。韓宗碩さんの他にも、大阪、兵庫などで指紋拒否を闘った方がたの関係資料も展示しています。

これらを展示するにあたって心がけたのは、資料の背景にある様ざまな方がたの顔が見え、その主張に触れることができるようにするという点です。そのような意味で、実物資料、写真、パネルのひとつひとつについて、資料に関わる当事者の方がたに解説文を執筆していただきました。これらを読んでいただくことで、資料がもっている意味が、より深く、生き生きと伝わってくるのではないかと思います。

リニューアルしたリバティおおさかの
「在日コリアン」のコーナー

このほか検索映像では、解放直後の朝鮮人学校の様子などをとらえた貴重な歴史映像や、前述した姜富中さん、韓宗碩さんへのインタビューなどをご覧になれます。また、聖公会生野センターの呉光現（オクァンヒョン）さんへのインタビュー映像「猪飼野の生活史」などを鑑賞することができるビデオブースもあります。

大阪人権博物館への、皆様のご来館を心からお待ちしております。

（むん　ごんふぃ　大阪人権博物館　学芸員）

[最終ページにリバティおおさかの案内があります。]

聖公会生野センターの活動

写真で観る

のりばんクリスマス

あでやかなプチェチュム（扇の舞）を披露する張智恵（チャン チヘ）さん

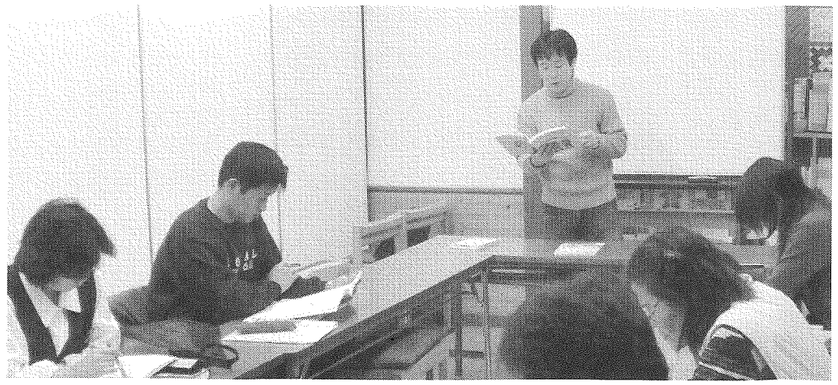
チャンゴのリズムに合わせて歌い、踊るハルモニたち

昨年７月から始めたのりばん（朝鮮語で遊び場という意味）。

毎週水・金においしい料理を食べて楽しんでいます。12月21日には韓国舞踊家の張（チャン）智恵（チヘ）さんを招いて舞踊鑑賞、ビンゴゲーム、最後はみんなで歌って踊って楽しみました。（水・金　11時から２時くらいまで）

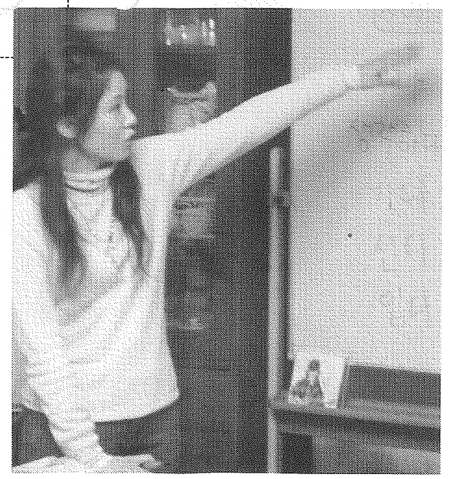
韓国語教室

入門からほとんど日本語を使わない研究クラスまで。昨年は自主旅行を実施したり、学び合いつつ楽しい時空間です。韓国映画・ドラマのＤＶＤ多数あります。（毎週火曜日午後７時）



入門クラス。１年間で簡単な会話ができるようになりました。

中級クラス。在日３世の高燦玉（コ・チャンノク）先生



石井さん（講師）指導のＴシャツ：斬新な展示方法で楽しめました。

出品数が増えて、壁一杯に受講生の作品が並んでいます。

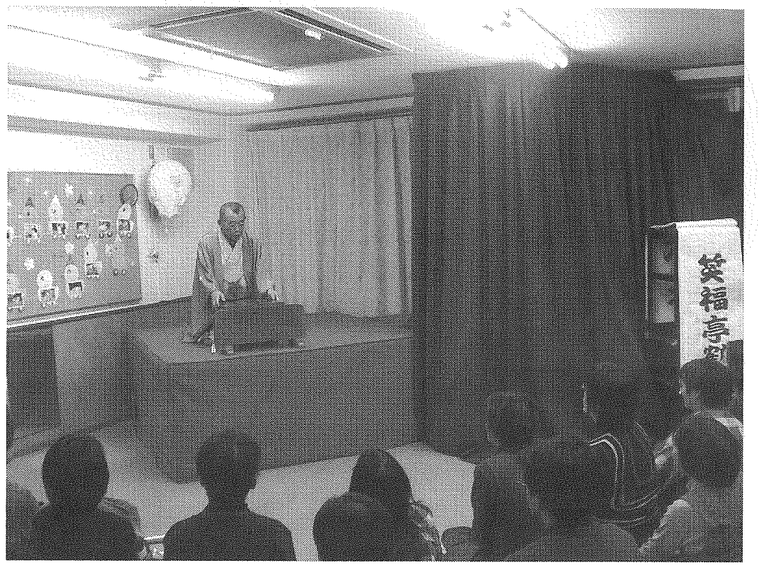
教室開講から早13年。現在は20名以上のおとな・こどもの障害者・健常者が学んでいます。毎年秋に開催する「クリンもだん美術展」。遠くは名古屋からも来場者があるなど多くの人が楽しみにしています。今回からは絵画だけでなく、Ｔシャツなどにデザインした造形作品も展示しています。ボランティア募集中（水・木曜日午後７時　土曜日午後２時30分）

講師の大澤さん、情熱の固まりのような人

祝80回　笑福亭鶴瓶師匠来演！

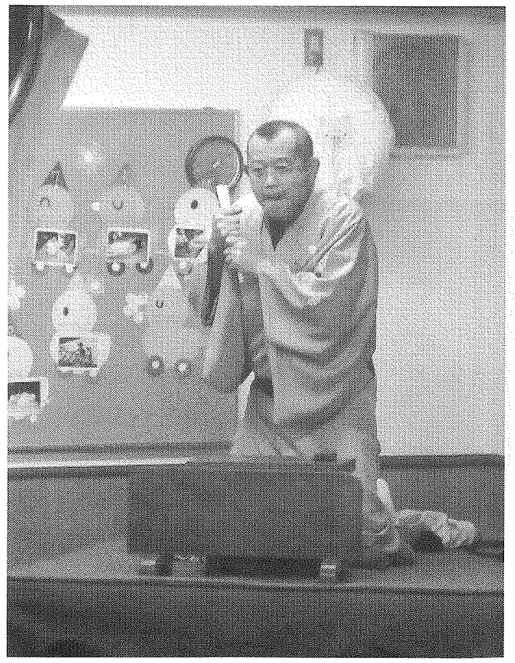
こみち寄せ

聖公会生野センターで一番最初に始めた定例のプログラム。もう14年目になりました。11月14日の80回記念会では、人気絶頂の笑福亭鶴瓶師匠も来られて、２席の落語を熱演してくれました。お客さんは２階に入りきれないほどの大入りで、「席亭」としてはうれしい悲鳴を上げた１日でした。（奇数月第３金曜日午後７時）



超満員のこひつじの保育室

80回すべて出演の笑福亭仁嬌師匠


演目「あたごやま」を熱演する鶴瓶師匠

訪韓ツアーに参加して感じた

北谷順一

生まれてから高校を卒業するまでの18年間を生野で過ごした。物心付くか付かない頃から在日韓国朝鮮人に接する機会に恵まれていた。近所や同級生の中には何人も「金」の付く苗字の友人がたくさんいた。知らず知らずのうちに在日の人と接触していた。

にも関わらず、日本と朝鮮半島の間で何があったのかなど微塵も知らなかった。そんなことは学校では習わなかった。大人になって海外に行く機会が増えた。外国人の友人もできた。その中には韓国人も含まれていた。韓国を知る機会が増えた。その中には生野センターも含まれていた。

前置きが長くなったが、昨年大韓聖公会の朴（パク）主教が来日されて川口教会で講演をなさった。その中で社会宣教活動のひとつとして行われている「分かち合いの家（ナヌメチップ）」について語られていた。「実際どんな感じなのだろう？どんな活動をしているのだろう？」今回のツアーを企画していた私は早速、聖公会生野センターの呉（オ）主事に相談してそこの見学を盛り込んでもらうことにした。

水原（スウォン）教会聖堂にて（任大彬（イムテビン）司祭の出身教会）

分かち合いの家の前にて（右から2人目が北谷氏）

それはホームレスやしょうがい者といったいわゆる社会的弱者を支援する活動を行っていた。（1997年の）IMFの通貨危機以降「持つ者」と「持たざる者」の格差は開く一方だ。「資本主義」という自由競争の中でシステムからはじき出された人たちをただ保護するだけではなく、自立することを目標にした活動だ。私の当初のイメージとは異なっていた。社会から見捨てられ暗く沈んだ雰囲気かと思っていた。しかし実際行ってみて感じたのは、そういった暗さよりもむしろ明るさだった。必死に生きようと努力する人たちとそれを懸命に支援する人たちの間から感じられる明るさ。言い換えれば暖かさ。そういったものが感じられた。

そこでふと考えさせられる。私に何かできないのか。日本にもそういった「持たざる者」や救いの手を求めている人たちはたくさんいる。私に何かできないのか。私に与えられた「タラント」はそんなに多くはない。しかしそれを土の中に埋めておくように学んだ記憶はない。

このような訪韓ツアーのような企画に今後も携わり、多くの人が韓国を知るためのお手伝いが少しでもできればと思った。

（きたたに じゅんいち　大阪聖アンデレ教会信徒）

本から「在日コリアン」を考える ㉔

鳳仙花、咲いた

趙栄順
定価1600円+税
新幹社

著者の趙栄順（チョヨンスン）さんの名前を記憶したのは、もう20年前のこと。私が勤めていた三千里社に来たお手紙でだった。端正な文字、心温まる文章、私より6歳も若いのに、と驚いた。

『鳳仙花』という同人雑誌がある。本扉の書は趙栄順さんのもの。彼女はこの雑誌の同人で、毎号のようにエッセイを寄せている。私たちの世代（6歳違いも今や同世代となった）には、ジーンとくるエピソードばかり。

その趙栄順さんと初めてお会いしたのは、物理学者の金徳洲先生がお亡くなりになった時だった。お連れ合いが物理学者で、金先生の後輩だったのだ。細かな話が出来なかったのは残念だったが、知り合いにはなれた。

『鳳仙花』誌上で、趙栄順さんの出版を知った。『日本の友への手紙』という本で、発行は朝日出版サービス。よかったね、と思う半面、新幹社で作りたかったな、という思いが残った。

私には座間和緒子さんという姉（のような人）がいる。座間さんと趙栄順は親友で、韓国に旅行に出かけたりしている仲。趙栄順さんが座間さんに、新幹社での出版を相談した。そして『鳳仙花、咲いた』の出版になった。『鳳仙花、咲いた』は新幹社が出したいと思い続けていた本なのである。

『鳳仙花、咲いた』は「在日」そのものが生活者の眼で書かれている。

女性の視点で、父・母・義父・義母の人生を振り返り、祖国とは何か、故郷とは何か、家族とは何かを考える。祖国から愛されないが故に、祖国を見たことがないが故に、祖国を神聖化してしまう「在日」。「在日」の歴史。

そして恋愛、就職、結婚、出産、子育てと、何度も何度も壁にぶつかりながら「在日」として、日本で生きていくということを考える。持ち前の明るさで、がむしゃらに生きてきた「在日」。

北（共和国）へ帰った友人への思い。帰国直後の友人からの手紙に無理解だった自分が、今では、そのような手紙しか書けなかったのだね、と言えるようになった。

三世の娘の十六歳の誕生日、つまり外国人登録をする日。指紋押捺制度はなくなったとはいえ、国家によって「在日」が管理されているという実感が離れない。自分たちの体験を思い起こし、娘に重い帽子を被せてしまうという無念な気持ち。しかし娘の力を信じる母の思いもあらわれる。

趙栄順さんは本書の「あとがき」にこう書く。

「昨今、韓流を反映して『韓国』はかっこういいものの代名詞のようになりましたが、在日コリアンの生きにくさに変わりはありません。韓国の俳優がもてはやされても、日本の食卓にキムチが載るようになっても、身近に住む在日コリアンについては、無関心、無理解という現実があります。私の拙い文が、在日コリアンを理解するための一助になればと願います。」

この思いは、実は出版社の発行人も同じ。北朝鮮政府の日本人拉致事件は、在日コリアンに逆風を吹き付けた。韓流ブームも、「在日」は限られたパイ（韓国が好きな人々）の中では逆風といえるのだろうか。こんなに出版人が自信を持って作った本なのに、まだまだあまり話題にならないし、売上も伸びていない。つい、そんなことを考えてしまう。

『鳳仙花、咲いた』は新幹社の一推しの本なのである。　（こ・いーさむ　新幹社代表）

『鳳仙花、咲いた』は
聖公会生野センターで取り扱っています。
TEL 06-6754-4356　FAX 06-6754-4357
e-mail : ikuno@nskk.org

自立

丁　章

半島サラムになれずとも
サラムの立つ地
サラムの言葉が
その在るがままで
あの半島と共に在る
同等に在るのだ
だからひるむな
もうへつらうな
誉れ高く堂々と
サラムであればいい
自らサラムらしくあることを
しずかに求めつづければいいのだ

サラム――사람（「人」という意味）
筆者は、新たな総称としての「朝鮮人」の意味で用いている

丁　章　（ちょん・ぢゃん）
1968年、京都市にて出生
大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業
現在、大阪府東大阪市在住
著書
詩集『民族と人間とサラム』（新幹社）
詩集『マウムソリ　－心の声－』（新幹社）
詩集『闊歩する在日』（新幹社）

丁章さんの詩集（第3集まで発刊）は
聖公会生野センターでも取り扱っています。

あっけらかんの罪

大橋　襄

新聞社の旧友が、久々にわが家にやってきた。喉頭がんのため声帯を摘出したと聞いてはいた。のどにマイクのような器械をあてて懸命に話す彼の声は、抑揚のない無機質なものだけに、いっそう切々たるものがあった。親切にしてくれる人も多いが、一方、店で買い物しても知らぬ顔をされたり、後回しにされたり——。寂しい思いがする、と言っていた。

職場で大きな声をあげて張り切っていた彼。いつもユーモアあふれる会話で人を笑わせていた彼。聖歌隊ではテナーのパートをすばらしい声で歌っていた彼。いま目の前にいる彼の過去と現在の落差にすっかり動転して、私は号泣してしまった。なぜか彼の手を握りながら、「すまない、すまない」と言っていた。何もしてあげられない自分、彼の重荷を心の底から共有していない自分が情けなかった。とにかく、自分があっけらかんと元気なことが、何よりも申し訳なかった。「なんとか生きていくさ」と、元気に手を振りながら去っていく彼の後ろ姿に、手を合わせて祈った。

前号のウルリムで丁章（ちょん・じゃん）さんの詩、「コンビニときムチ」を読んで、なにか似たような気持ちになった。あっけらかんと見過ごしてしまう点描の中に、友の魂の深い深いひだから押し出されるような、重く低い声があって、私の魂を揺り動かすのを感じた。

「戦後60年も経って、まだやらなあかんの？」と、生野センターの働きについて無邪気に問い掛けてきた友がいた。戦中と戦後を生きてきた私にとって、無慈悲な差別の過去と現在を、とても忘れることはできない。大事な大事なことなのに無関心に覆われて、いつしかあっけらかんと「風化」していくこと——。恐ろしいことだ。罪悪とさえ思う、神の前に。

（おおはし　たかし）

大阪人権博物館（リバティおおさか）

〒556-0026大阪市浪速区浪速西3-6-36
TEL06-6561-5891㈹　FAX06-6561-3572
URL　http://www.liberty.or.jp

開館時間　午前10時～午後5時（ただし入館は午後4時30分まで）
休館日　毎週月曜日（ただし祝日は除く）・祝日の翌日
毎月第4金曜日・年末年始・臨時休館日
入館料　大人個人250円／団体200円　大学・高校生個人150円／団体100円
特別展開催時　大人個人500円／団体400円　大学・高校生個人300円／団体200円
※団体は20名以上より。中学生以下、65歳以上、障害者（介助者含む）は無料
※人権週間（毎年12月4日～10日）は無料
交通機関　・JR大阪環状線「芦原橋駅」下車、南へ約600メートル
・JR大和路線「今宮駅」下車、西へ約800メートル
・大阪市バス「浪速西3丁目」バス停下車、西へ約200メートル

余韻

■韓国市民の眼は今回が最終回です。多忙な中、原稿を送ってくれた姜恵楨さんに感謝です。■今号からセンター活動の写真ページをつくりました。次号からは装いを新たに編集していく予定です。乞期待!?（ピックワンチャ）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇正会費　年額　1口　5,000円
◇後援会費　年額　1口　3,000円
・郵便振込00910-1-321780「聖公会生野センター」

◇自由献金・クリスマス献金
・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
・銀行振込 三菱東京ＵＦＪ銀行 東大阪支店
普通預金　3711311「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0003
大阪市生野区小路東1-17-28
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357
E-mail: ikuno@nskk.org
http://www.nskk.org/province/ikuno
発行人：宇　野　　徹
編集人：大　橋　　襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。